

# 奈良佐保短期大学における音楽教育関連科目のカリキュラム に関する一考察 —保育者および小学校教員養成機関におけるピアノ指導法—

## A Study of the Curriculum of the Music Subjects in Nara Saho College —Piano Teaching Method in Training Courses of Nursery and Elementary School Teacher—

多田 純一 紺谷 志野<sup>1</sup>  
TADA Junichi KONTANI Shino<sup>1</sup>

キーワード：ピアノ学習，ピアノ指導法，カリキュラム，保育者，音楽教育  
Key Words：Piano Learning, Piano Teaching Method, Curriculum, Nursery Teacher, Music Education

### 1. はじめに

本論の目的は、奈良佐保短期大学（以下、本学とする）における音楽関連科目のカリキュラムについて検討し、その長所および短所を明らかにすることで、ピアノ指導法の改善点を考察することである。音楽関連科目（音楽基礎演習ⅠおよびⅡ，音楽ⅠからⅣ，保育（表現・音楽））は<sup>注1)</sup>，それぞれの科目ごとにシラバスにおいて学修内容，学修成果，授業計画，成績評価方法とその基準等が設定されている。いずれの科目も単体として独立しているが，それぞれが密接な関連性を持っており，関連性を保つことで音楽関連科目全体としてのカリキュラムが成立している。

ピアノ実技のグレード表を含むこのカリキュラムおよび音楽教育システムは，前任の音楽専任教員である吉田直子が独自に考案し，設定した，オリジナリティのあるシステムである。吉田はグレード認定制度の構築について「順次達成することにより，保育者としてのピアノ要求水準に導かれるように段階設定している」<sup>1)</sup>と述べている。

本論の筆頭著者は，今年度（2018年度）本学の音楽専任教員に着任した。その際，後任者として新たなシステムを構築するのではなく，前任者のシステムを踏襲することで，本学における音楽教育の充実性を担保することができると判断した。その判断には，着任時に新たなシステムを導入することによって，混乱を引き起こすことを回避しようとした側面もある。そして，実際に前任者が構築したシステムを実施することで，後述するこのシステムの長所，すなわち利点の多くを実感した。しかしながら，利点と共に，改善するための検討の余地が残されていると思われる課題についても見られたため，本論にてその改善点を考察し，次年度以降のカリキュラムおよび音楽教育システムに反映させることを目標とする。

### 2. 先行研究および本学における音楽関連科目のカリキュラム

#### 2-1 先行研究とその背景

保育者および小学校教員養成機関におけるピアノ指導法に，直接的あるいは間接的に考察されている論文は，毎年のように数多く発表されている。例えば，論文検索サイト CiNii（NII 学術情報ナビゲータ [サイニィ]）において，「保育」空白「ピアノ」で2018年に絞って検索すると，71件が表示される<sup>注2)</sup>。そのうち1件は重複，1件は受容史研究のため，この2件は除去されるが，それでも1年間で69件においてピアノ指導法は考察され，その

---

<sup>1</sup> 大阪芸術大学短期大学部保育学科通信教育部  
Osaka University of Arts, Department of Nursery, Correspondence Course

在り方が検討されている。前年の2017年に絞って同様の検索をしても、80件が表示され<sup>注3)</sup>、この先行研究の多さはここ数年に限ったことではない。

保育とピアノに関する論文の増加傾向について、安田寛らはその累積数を調査し、「1970年は論文数が少なく、1980年代半ばから1990年代半ばまで増加傾向が顕著になり、1990年代半ば以降から増加傾向が急速になる。これらの論文の大半は短期大学教員によって書かれたものである<sup>2)</sup>と報告している。そして「1980年代から1990代までは短期大学の教育専攻学生数はゆるやかな減少傾向にある。この減少傾向と、これらの論文の大半は短期大学教員によって書かれたものであることを併せて考えると、1990年代半ば以降に保育とピアノというテーマの論文の増加傾向が急になることは、この時期にこのテーマに対する関心が急激に高まったとみていい<sup>3)</sup>と述べており、さらにその要因として「保育とピアノというテーマに対する関心が急激に高まったこの時期は、オルガン製造が中止され、出荷されなくなり、幼稚園、ついで保育園でオルガンが使われなくなり、専らピアノの使用されるようになった時期である。以上のことは保育にピアノを偏重・多用することは「保育におけるピアノの流行」の結果であることを示唆するものである<sup>4)</sup>と説明している。

安田らが得た結論である「保育におけるピアノの流行」と共に、先行研究が多く発表されている理由として、保育者養成機関への入学者が、入学時点でピアノをはじめ習う学生が増加している背景が挙げられる。かつては、入学前には『バイエル・ピアノ教則本』（以下、『バイエル』<sup>注4)</sup>とする）を終え、入学してからピアノ実技に困ることのないように準備をすることが一般的であった。しかしながら、近年では入学時にピアノ学習が未経験であっても、卒業までに必要なピアノ演奏技術を習得することができるカリキュラムが整っていることが前提となりつつある。この傾向について、新海節は「近年、保育者養成校においては、学生のピアノ演奏技術の低下が叫ばれている。これは、入学前ピアノ学習未経験者の学生の増加、ピアノの授業時間の不足、就職試験対策、幼児教育・保育現場からの要求など様々な要因が考えられる<sup>5)</sup>と述べており、その背景を裏付けている。

これらのような状況を踏まえ、筆者らは、リズム曲を中心に、特にピアノ演奏初心者を対象としたピアノ指導法について考察した<sup>6)</sup>。その考察では大阪芸術大学短期大学部通信教育部におけるアンケート結果を中心に述べたが、本論では、本学の音楽関連科目のカリキュラムを中心に考察し、それに対して大阪芸術大学短期大学部通信教育部で実施されているカリキュラムと比較する。

## 2-2 本学における音楽関連科目のカリキュラムおよび音楽教育システム

本学における入学時、1年生前期で履修する音楽関連科目は「音楽基礎演習Ⅰ」および「音楽Ⅰ」である。

「音楽基礎演習Ⅰ」の主な目標は、音楽理論の知識や音楽的基礎能力を身に付け、実践的に活用することにより「音楽Ⅰ」で必要な読譜力を身に付けることができることである。ひとつのクラスを前半と後半に分け、「理論」はグランド・ピアノが置かれている教室にて講義を中心として行い、「ソルフェージュ」は電子ピアノをひとり1台使用することが出来るML教室にて実技を中心に行い、45分で前半と後半が入れ替わる。「理論」では主に川辺真による楽典の著書<sup>7)</sup>を中心に用い、「ソルフェージュ」では前任者が考案した「音楽基礎演習テキスト」<sup>8)</sup>を用いる。「理論」と「ソルフェージュ」の共通点は、講義と実技に分けているものの、いずれにおいても主要三和音（属七を含む）に重点が置かれるところである。特に前述の「音楽基礎演習テキスト」では、子どものための弾き歌いに使用する主要な作品の右手の旋律のみがテキストに示されており、タイトルや歌詞、左手の伴奏付けは学生自身が書き込むことで完成させていく内容となっている。読譜力を身に付けると共に、手や指が主要三和音を自然かつ感覚的に覚えられるような授業展開となっている。

「音楽Ⅰ」の主な目標はピアノ実技能力の習得と向上であるが、ここでもクラスは前半と後半に分けられる。「クラス授業」はグランド・ピアノが置かれている教室にて主要三和音についての理論的な講義や歌唱指導が中心となる。片方の「フォロー・アップ」では

ハ長調、ヘ長調、ト長調、ニ長調の主要三和音のカデンツの確認を担当教員から受けつつ、各自が順番を待ってそれぞれ担当の教員から個人レッスン室にて約 15 分レッスンを受ける。すなわち、個人レッスンの約 15 分以外は、「クラス授業」、「フォロー・アップ」ともに、「音楽基礎演習Ⅰ」の復習をここで行うことになるのである。また、1 つの科目で 3 人の教員と接することになり、複数の視点から音楽を学べる充実したシステムとなっている。

1 年生後期における「音楽基礎演習Ⅱ」は「音楽基礎演習Ⅰ」と同様に「理論」と「ソルフェージュ」が 45 分で前後が入れ替わり、内容は「理論」、「ソルフェージュ」ともにコードネームが中心なる。「音楽Ⅱ」も「音楽Ⅰ」の形態と同様である。「クラス授業」は理論的な講義から発声法を中心とした歌唱指導へと内容が変化するが、「フォロー・アップ」における各調の主要三和音の確認と個人レッスンは変わらない。このように、1 年生の段階で 2 つの科目とそれを後続する科目にて徹底的に主要三和音を学ぶことが、本学のカリキュラムの特徴である。また、後述するように、ピアノ実技についてはグレード制を取り入れており、単位取得のためには一定の演奏能力が前提とされる。

2 年生前期ではこれらの音楽の基礎知識およびピアノ実技能力をもって「保育（表現・音楽）」を履修する。ピアノ実技については、前期では「音楽Ⅲ」、後期では「音楽Ⅳ」にてスキル・アップすることが可能であるが、選択科目となっているため希望者のみが履修する。

「保育（表現・音楽）」も他の科目と同様に、前半と後半に分かれる。「クラス授業」では主に子どものための歌について、J-POP や合唱曲も含めた作品の歌唱および発声指導が中心となる。「フォロー・アップ」では 1 年生から引き続き主要三和音の確認と共に、伴奏付けの方法論が提案される。また、各自が順番を待ってそれぞれ担当の教員から個人レッスン室にて約 15 分レッスンを受ける。本論の筆頭筆者は、着任時にこの科目において個人レッスンを担当し、1 回目の講義において担当した学生全員がハ長調の主要三和音を迷うことなく打鍵する能力を持っていることを知り、本学の音楽教育システムが成功していることを実感した。ヘ長調やト長調では個人差が見られたが、様々な角度から行われる主要三和音の徹底した教育は、本学における音楽関連科目のカリキュラムの長所であると言える。この長所は小学校教員免許を取得する教育コースの学生のみが履修する「音楽科教育法」における歌唱共通教材の伴奏付けでも活かされている。しかしながら、講義を重ねるうちに課題が見えたこともまた事実である。

「保育（表現・音楽）」では、作品の難しさによってグレードがカテゴライズされている。このグレードは特にグレードをアップさせることを目的として設けられたものではないが、単位取得の前提としては、グレード 2 以降の作品を 10 曲弾き歌いすることとなっている。《ちょうちょう》などの簡単な作品がグレード 1 にあたり、指定されている作品の中から任意の 10 曲を選択し、弾き歌いすることができれば、そのグレードを習得したことになる。その際の左手の伴奏付けは 1 小節あたり 1 つあるいは 2 つの和音の打鍵でよい。使用する楽譜は「音楽基礎演習テキスト」あるいは教科書に指定されている『こどものうた 200』<sup>9)</sup> や独自に用意した楽譜のいずれでも構わない。続いて、グレード 2 以降で任意の 10 曲を選択し、弾き歌いする。すなわち、単位取得の時点で、グレード 1 と 2 以降を合わせると計 20 曲の弾き歌いのレパートリーを持つことになる。しかしながら、グレード 2 の左手の伴奏付けは、単純な和音の打鍵だけでなく、アルペジオやリズム付けの工夫、あるいは既存のオリジナル・ヴァージョンが課題とされている。学生の多くに、この伴奏付けで躓きが見られた。最終的には履修者の全員が単位を修得し、20 曲のレパートリーを得るところまでの指導が行われたが、よりスムーズな導入が望まれる。次節で説明するが、「音楽Ⅱ」の単位取得にあたり、左手の分散形はすでに『バイエル』で学んでいる。そして、主要三和音の打鍵をする能力も有している。それにも関わらず、それを分散させようとすると弾けなくなるという現象が起こるのは、その要因として応用力までは身に付いていないことが挙げられる。型は身に付いても、それを応用する力までが身に付いていなければ、保育者として必要な弾き歌いの技術を十分に得るところまでは進めているとは言えない。

音楽関連科目はそれぞれの内容が密接に絡むカリキュラムとなっているが、本学の音楽教育システムが抱える短所と課題がこの応用力に見られ、改善が必要とされる。

続いて、ピアノ実技グレードについて検討する。

### 2-3 本学におけるピアノ実技のグレード

先に述べた通り、本学では「音楽Ⅰ」から「音楽Ⅳ」までのピアノ実技において、その技術向上のためにグレード制を取り入れている。以下に初級および中級の一覧を表1に示す。

表1 本学におけるピアノ実技のグレード表（初級および中級）

		『バイエル』の課題番号									備考
初級	グレード1	4	5	11	14	17	18	21	31	39	グレー塗3曲が必須
	グレード2	46	48	50	52	55	57	58	59		グレー塗5曲が必須、 かつ別途選択曲1曲
	グレード3	60	62	64	66	72	73	75	77		グレー塗6曲が必須、 かつ別途選択曲1曲
中級	グレード4	78	83	85	89	92	93	94			グレー塗4曲が必須、 かつ別途選択曲1曲
	グレード5	80	81	82	88	91	103				左記のうち4曲を選択、 かつ別途選択曲2曲
	グレード6	97	98	100	102	104	105				左記のうち1曲を選択、 かつ別途選択曲4曲

上記に示したように、グレード1からグレード6までは『バイエル』を中心とした構成である。入学時にピアノ学習の未経験者は<sup>注5)</sup>、グレード1から開始し、経験者の場合はピアノ実技担当教員と相談の上、開始グレードを決定する。そのため、幼少期からピアノを習っている学生の場合は上級から開始する場合もあり、柔軟に対応している。「音楽Ⅰ」および「音楽Ⅱ」の単位認定に関わるのが、このグレード表の初級にあたる部分である。1年生の前期で履修する「音楽Ⅰ」では、グレード2を取得し、かつ発表会にて暗譜で演奏することが単位取得の条件である。ピアノ学習未経験の学生が半期の15コマで『バイエル』No.59を演奏する技術を得るためには、相当な予習と復習の時間を必要とするが、その負担を軽減するために、課題曲を多く示しつつも、必須曲を最小限に絞っているところがこのグレードの特徴である。グレード1はグレー塗の必須曲を1回のレッスンで1曲、グレード2では概ね2回のレッスンで1曲仕上げれば、グレード2を取得できることになる。この方法は、無理なく、かつ苦手意識を持たずにモチベーションを保ちながら前期の「音楽Ⅰ」の単位を取得することができるように配慮されている。学習ポイントは「ト音記号、両手の動き、分散和音の伴奏」と設定されている。

No.55 (図1)では左手が分散和音の「ドソミソ」の形であり、かつト音記号とヘ音記号を行き来する。No.59は8分の3拍子であり、左手は「ドミソドミソ」の形である。そして、『バイエル』では複雑な和音を用いず、基本的に主要三和音に終始している。



図1 『バイエル』No.55 第1小節から8小節 初版（多田個人蔵）

グレード2の学習ポイントは「ト音記号、6/8拍子、8分音符、付点4分音符」である。表1に示した『バイエル』の課題に加えて、別途選択曲から1曲弾く必要がある。その課題は《きらきら星》やテオドール・エステン作曲《泉のほとり》、カール・ツェルニー作

曲《そよ風》等であり、こういった「お楽しみ曲」を各グレードに設定することで、ピアノ演奏を楽しみながら、グレードをアップする喜びが感じられるようになっている。すなわち、子どものための作品のピアノ伴奏の演奏技術は、1年生前期の「音楽Ⅰ」を履修した時点で身に付くように、このグレードは構成されているのである。

1年生後期で履修する「音楽Ⅱ」の単位取得は、最低でもグレード3の取得、そして発表会での暗譜演奏が前提である。『バイエル』はNo.77までに抑えられており、グレー塗の必須曲は6曲のみである。急激に難しくなる訳ではなく、グレード2の演奏技術に加えてへ音記号に慣れることができればクリアすることが可能な内容である。グレード3の学習ポイントは「へ音記号、音高移動、対位的両手の動き、半音階、ト長調、ニ長調」と設定されている。選択曲としては、ルイス・ケーラー作曲《お庭で》、オーストリア民謡（もしくはドイツ民謡）《かわいいアウグスティン》、トマス・ヘインズ・ベイリー作曲《むかしむかし》などの耳馴染みのある作品や、学習ポイントに示されている対位的な両手の動きが意識されたジェイムズ・フック作曲《ガボット》、ツェルニー作曲《アレグレット》、ヘルマン・ベーレンス作曲《カントリー・ダンス》が指定されている。このグレード3を終えた時点で初級が終了となる。

このように、本学におけるピアノ教育システムは、ピアノ学習の経験がなくても1年生の1年間で、2年生で履修する「保育（表現・音楽）」で必要なピアノ演奏技術が身に付くことを想定して構成されている。短期間で著しい成果を学生自身が実感できるようになっている点がこのグレード制の長所、利点である。しかしながら、付け焼刃は脆弱性を併せ持つ。「保育（表現・音楽）」における左手の伴奏付けを工夫する際に躓きが見られたことは先の述べた通りである。表1に示したグレード表では、『バイエル』の中でも演奏技術の向上と音楽の基本的な知識を学ぶべき重要な作品が抜け落ちている。No.16（図2）では、左手が伴奏形ばかりではなく、部分的にメロディックな反行形が用いられる。ピアノ学習の導入期において、左手が必ずしも伴奏形ではない作品を学ぶことは、指の運動能力だけでなく、指を自身の意思で自由に動かすための頭の体操として重要なことである。



図2 『バイエル』No.16 第1小節から8小節 初版（多田個人蔵）

同様のことはグレード3におけるNo.60（図3）が課題とされつつも、必須曲になっていない点にも見られる。また、先に示したように、選択曲に対位的な両手の動きが意識された作品が含まれてはいるものの、同時に左手が伴奏形に終始する《むかしむかし》が含まれていることで、それらをすり抜けてグレード3を取得することが可能なのだ。



図3 『バイエル』No.60 第1小節から11小節 初版（多田個人蔵）

グレード3にはNo.62やNo.75といった左手が動く作品は確かに含まれているが、最低限に抑えられていると言っても過言ではない。No.60はポリフォニーを使用しており、カノン曲としての側面も見られ、左手は圧倒的に伴奏形が多い『バイエル』の中では特殊な位置づけとなる。この作品が必須曲になっていないところに、学生の躓きを回避しようとする意図が見え隠れする。さらに明確に言うと、こういった作品を必須課題に入れないことが、「保育（表現・音楽）」における左手の伴奏付けの応用力の欠如と演奏技術の非発展性につながっていると考えられ、今後の改良の余地が見られる。

加えて、「音楽Ⅱ」を単位認定するグレード3に、付点8分音符と16分音符が組み合わされた「付点のリズム」の作品が1曲も入っていない点が問題点として挙げられる。阪田順子は「保育者養成で求められる最小限の曲の数々には、付点を使ったものが多い」<sup>10)</sup>と述べ、No.98の指導法を考察している。本学におけるグレードでは、No.98はグレード6の選択曲のひとつに入っている。天野蝶作詞、一宮道子作曲の《おべんとう》をはじめ、子どものための歌には付点の音型が示される作品が多い。保育者として必要な演奏技術の習得を目的とするならば、付点のリズムが含まれるNo.88やNo.89などをグレード3の最後の作品として先取りし、必須曲に指示しておくことで、「音楽Ⅱ」と「保育（表現・音楽）」との関連はより密接度が高くなり、ピアノ演奏から弾き歌いへの自然な移行となり得ると思われる。

ここまでにおいて、本学における音楽関連科目のカリキュラムとその音楽教育システムを考察してきたが、第三者の視点からの評価が必要である。そのために、大阪芸術大学短期大学部通信教育部で実施されているカリキュラムを提示し、比較考察する。

### 3. 大阪芸術大学短期大学部通信教育部における音楽関連科目のカリキュラムとその考察

#### 3-1 大阪芸術大学短期大学部通信教育部における音楽関連科目のカリキュラム

大阪芸術大学短期大学部通信教育部保育学科は、2年間で幼稚園教諭2種免許状の取得を目指す幼稚園コースと、3年間で保育士資格および幼稚園教諭2種免許状の取得を目指す保育コースがあり、それぞれの音楽関連の必修授業は、「音楽Ⅰ」、「音楽Ⅱ」、「音楽Ⅲ」、「音楽Ⅳ」である。「音楽Ⅰ」、「音楽Ⅱ」はレポート課題提出による採点評価、「音楽Ⅲ」と「音楽Ⅳ」はスクーリングによる大学での対面授業と実技試験による総合的な採点評価となっている。

通信教育の授業では、通学の授業を受講するのに比べて学費が割安であることや、大学に指定された出校日以外は、各自の生活の中で自由な時間に学ぶことが出来るという利点がある一方、指定されたテキストとシラバスに記載されているテキストの補足・解説をもとに、各自でテキストを読み解き学ばなければならないという難点もある。

「音楽Ⅰ」では、基礎的な音楽理論を学ぶことを目的としている。野崎哲による楽典のテキスト<sup>11)</sup>をもとに、付属の問題集の指定箇所を解き、各自で回答、採点する。レポート課題は、上記の内容のいくつかの設問にレポート用紙を使用し、回答する。

「音楽Ⅱ」では、声楽課題とピアノ課題の録音提出となっている。声楽課題は『日本童謡歌唱歌全集』<sup>12)</sup>より指定された54曲のうちから1曲を選択し、歌唱旋律部分を移調せず現調で、鍵盤楽器（ピアノ等）で弾きながら同時に歌唱するように指示されている。その際、前奏、間奏、後奏は省略し、演奏楽譜内に記載されている歌詞のみを歌唱する。楽譜外の歌詞は省略としている。適度な速度、リズム、音程、発音といった演奏能力を評価する。ピアノ課題は(A)課題曲、(B)自由曲の計2曲の演奏が指示されている。(A)課題曲は、『バイエル』の中よりNo.55, 59, 60, 66, 72, 76より1曲を選択し演奏するように指示されている。(B)自由曲は、『バイエル』を終了していない場合やピアノ初心者は

(A)課題よりもう1曲を選択し演奏する。『バイエル』終了以上の場合、各自のレベルにあった5分以内のクラシック・ジャンルのピアノ曲を選択し演奏する。その際、簡易楽譜、対位法曲、自作曲は除く。(B)で『バイエル』以外のピアノ曲を選択した場合は、楽譜のコピーを添付し、演奏ジャンルやレベルの確認を行っている。

このように、大阪芸術大学短期大学部通信教育部保育学科の「音楽Ⅰ」と「音楽Ⅱ」では、各自で指定されたテキストをもとに音楽の基礎的知識を身に付け、録音による課題提出によって大学側がその習熟度レベルを確認するといった段階を踏んでいる。

ピアノ実技の授業は「音楽Ⅲ」、「音楽Ⅳ」におけるスクーリング授業からとなる。

### 3-2 大阪芸術大学短期大学部通信教育部におけるピアノ実技と本学との比較考察

スクーリング授業の「音楽Ⅲ」は、担当教員による声楽実技、ピアノ実技の対面授業を受講する。授業時間は1日あたり1回90分の授業を5回ずつ、3日間全15回授業で行っている。

第1回から第7回は声楽実技で、「音楽Ⅰ」、「音楽Ⅱ」をもとに、歌唱法の習得として発声法を学習し、読譜力、音程、リズムの基礎的理解の習得と実践を行う。課題曲はテキストの『世界名歌曲全集』<sup>13)</sup>、『ピアノ伴奏 日本童謡唱歌全集～心に残る日本の歌～』<sup>14)</sup>から選曲される。

第8回から第15回のピアノ実技は、課題曲(A)『こどものうた200』<sup>注6)</sup>から選択曲、(B)『バイエル』と各自が選択したピアノ曲により、個人指導のピアノレッスンを受講する。(A)『こどものうた200』は、No.1～32, 34～40, 42, 43, 48～50, 52, 60, 61, 63, 66, 153～155, 157を除いた全ての楽曲より1曲選択する。(B)は、クラシック・ジャンルで全演奏時間が5分以内で完結するピアノ曲(「音楽Ⅱ」で選択した楽曲は除く)を1曲選択し、受講までに譜読み等各自で事前学習を行った上でスクーリング授業に臨むよう指示されている。ただし、『バイエル』が終了していない場合やピアノ初心者は、『バイエル』74, 75, 85, 88, 90, 97より2曲選択する。『バイエル』終了レベルより難易度が低い曲や簡易楽譜によるもの、『ツェルニー練習曲』<sup>注7)</sup>、『ブルグミュラー25の練習曲』のNo.1～3, 対位法楽曲, 自作曲は除くよう指示されている。第15回目のレッスン時に、課題曲を(A), (B)を通して演奏する試験が設けられている。その際暗譜は必要とされていない。「音楽Ⅲ」を受講するにあたっては、各自の事前学習が重要となっており、この時点で一定の演奏能力が求められるため、特にピアノ初心者にとっては大きな課題となっている。

「音楽Ⅳ」の授業時間、授業内容、進行方法は「音楽Ⅲ」に則した内容となっている。声楽実技、ピアノ実技ともに「音楽Ⅲ」と同じテキストを使用する。しかし、「音楽Ⅱ」や「音楽Ⅲ」で演奏した経験がある作品は含まないこと前提する。

第1回から第8回までの声楽実技では、「音楽Ⅲ」の内容をもとに、読譜力、音程、リズムの理解を深め和音記号、和声進行といった楽典の確認や、歌詞の理解と表情豊かな歌唱を最終的な目標としている。

第9回から第15回のピアノ実技の課題曲(A)『こどものうた200』では、指定された番号がやや変わるものの、「音楽Ⅲ」とほぼ同じ範囲から課題曲を2曲選択する。課題曲(B)ピアノ曲も同じくクラシック・ジャンルで全演奏時間が5分以内で完結するピアノ曲を1曲選択する。『バイエル』が終了していない場合やピアノ初心者は、No.81, 93, 94, 96, 98, 102より2曲を選択する。「音楽Ⅲ」と大きく変化している点は、第15回目のレッスン時に行われる試験で、(B)のピアノ曲を暗譜で演奏するという点である。課題曲(A)も2曲に増えており、(B)が『バイエル』以外のピアノ曲の場合は計3曲、(B)が指定された『バイエル』から選択した場合は計4曲を演奏する能力が求められる内容となっている。

大阪芸術大学短期大学部通信教育部保育学科のスクーリング授業におけるピアノ実技では、本学のようにグレード制を取り入れていないが、前述した実技内容と表1「本学におけるピアノ実技のグレード表(初級および中級)」を比較すると、以下のように説明することが可能である。

「音楽Ⅱ」に本学のグレード2が該当している。「音楽Ⅱ」、「音楽Ⅲ」にはグレード3、「音楽Ⅲ」、「音楽Ⅳ」にはグレード3からグレード6が該当している。大阪芸術大学短期大学部通信教育部保育学科のスクーリング授業では、年齢層やピアノ経験レベルも様々な学生が受講するため、それぞれの学生に合わせた、幅広いレベルに対応することが出来る

ように課題曲が設けられている。学生が、自身の課題を見据えて実技演奏作品を決定し、学習を進めていく、極めて主体的かつ合理的な学び方である。逆に言うと、通学制の本学との違いは、録音課題や3日間のスクーリングの授業内において演奏する作品の数が少ないところが通信教育に見られる特徴である。

また、「音楽Ⅰ」は本学の「音楽基礎演習Ⅰ」、「音楽基礎演習Ⅱ」に概ね該当しているが、基本的には各自の学習となっているため、ピアノ初心者にとっては、基礎知識の習得そのものが、非常に難易度の高い内容であると言える。しかしながら、こちらについても主体的な学びによって学習は進められ、実施されている。すなわち、学生自身の力で学習を進められるだけの向上心があれば身に付くということなのであろう。その知識の習得はレポート課題で確認され、単位取得として成立している。その一方で、本学が行っているような主要三和音の徹底した教育は行われていない。

#### 4. まとめ

本論の目的は、本学における音楽関連科目のカリキュラムについて、その長所および短所を明らかにし、ピアノ指導法の改善点を考察することであった。

前任者によって考案された本学における音楽教育システムは、「音楽基礎演習Ⅰ」、「音楽基礎演習Ⅱ」、「音楽Ⅰ」、「音楽Ⅱ」のいずれの授業においても主要三和音の教育と確認が行われており、それぞれの授業が連続性を持つだけでなく、密接に関わりを持っている優れたシステムであることが確認された。具体的には、1年生終了時点で主要三和音を自然に打鍵することができる点が長所として挙げられる。その技術は「音楽科教育法」における歌唱共通教材の弾き歌いにも使用することが可能である。また、ピアノ実技については、グレード制を導入することにより、学生が苦手意識を持たず、楽しみながらピアノ演奏実技の能力を向上させることができる点が長所のひとつである。

そして、それらの授業で得た知識と技術を持って2年生では「保育（表現・音楽）」が履修されるが、その際に左手の伴奏付けの応用力の欠如と演奏技術の非発展性が見られる点が短所として挙げられた。その改善策として、ピアノ実技のグレード表の改良の必要性が見られ、次年度以降に反映させることが望まれる。

続いて、本学の音楽関連科目のカリキュラムおよび音楽教育システムの特徴を第三者の視点から見るために、大阪芸術大学短期大学部通信教育部保育学科における音楽関連科目のカリキュラムおよび音楽教育システムについて考察した。そこでは、通信教育部ならではの、簡潔かつ合理的なシステムを確認することができた。

特筆すべき両者の共通点は、対位的な両手の動きが見られる『バイエル』No.60や、付点のリズムが繰り返されるNo.98が選択曲に入っているものの、いずれも必須課題ではなく、回避することが可能であるところである。両者ともに選択曲に入れているということは、『バイエル』の中でも、重要な作品に位置されていることが認識されていると捉えて問題はない。それにも関わらず、共に必須課題としていないことは、学生が躓きを感じやすい作品であると想定されているということが、要因のひとつであると考えられる。短期間に、合理的にピアノ演奏技術を身に付けるために、『バイエル』のすべての作品を学ぶ必要はない。しかしながら、保育者および小学校教員養成機関におけるピアノ指導の在り方として、No.60やNo.98のような作品を積極的に必須課題として取り入れ、技術的困難を避けるのではなく、克服することで確実なピアノ実技能力を身に付けることを目標とした。その上で、ハ長調、ヘ長調、ト長調、ニ長調、およびイ短調の主要三和音を自然に打鍵する技能が身に付いていれば、保育者および小学校教員として、保育あるいは教育現場において対応することが可能であると考えられる。

#### 注釈

注1) 本論では地域こども学科の学生の内、教育コースの学生のみが履修し、昨年度までは非常勤講師1名が担当していたことを踏まえ、「音楽科教育法」は主な考察対象に含ま

ない。ただし、音楽科の学習指導要領に示されている歌唱共通教材の弾き歌いの取り組みについては本論と関連するため、部分的に言及する。

注 2) 国立情報学研究所：「CiNii Articles - 日本の論文をさがす」「保育 ピアノ， 2018」，  
[https://ci.nii.ac.jp/search?q=%E4%BF%9D%E8%82%B2%E3%80%80%E3%83%94%E3%82%A%E3%83%8E&range=0&nrid=&year\\_from=2018&year\\_to=2018&count=20&sortorder=1&type=1](https://ci.nii.ac.jp/search?q=%E4%BF%9D%E8%82%B2%E3%80%80%E3%83%94%E3%82%A%E3%83%8E&range=0&nrid=&year_from=2018&year_to=2018&count=20&sortorder=1&type=1)  
 (2018.11.14)

注 3) 同上，「保育 ピアノ， 2017」，[https://ci.nii.ac.jp/search?q=%E4%BF%9D%E8%82%B2%E3%80%80%E3%83%94%E3%82%A%E3%83%8E&range=0&nrid=&year\\_from=2017&year\\_to=2017&count=20&sortorder=1&type=1](https://ci.nii.ac.jp/search?q=%E4%BF%9D%E8%82%B2%E3%80%80%E3%83%94%E3%82%A%E3%83%8E&range=0&nrid=&year_from=2017&year_to=2017&count=20&sortorder=1&type=1)  
 (2018.11.14)

注 4) 原著は次の通りである。Ferdinand Beyer: *École Préliminaire de Piano*, Mainz, Schott (1850)。その初版は、安田寛監修、小野亮祐、多田純一、長尾智絵著の『『バイエル』原典探訪：知られざる自筆譜・初版譜の諸相』<sup>15)</sup>において、確認できる。この本には、解説付きファクシミリにて初版の『バイエル・ピアノ教則本』すべてのページが掲載されており、テキストとして使用することが可能である。

注 5) 本学ではピアノ学習の経験者、未経験者を問わず、入学決定者に対して、入学前に計 3 回の事前講習会を実施している。

注 6) 本学で使用している引用文献 9) と同じテキストである。

注 7) 具体的な作品番号は指示されていない。

## 引用・参考文献

- 1) 吉田直子：「保育者養成校のピアノ学習プロセスにおける支援：マルカム・ノールズの「アンドラゴジー論」の検討を通じて」、『奈良佐保短期大学研究紀要』，24，p.14 (2017)
- 2) 安田寛，長尾智絵：「「保育におけるピアノの流行」と保育者養成機関ピアノ教員の関心の在り方との関係について」、『奈良教育大学紀要』人文・社会科学，59 (1)，p.165 (2010)
- 3) 2) と同書，p.165
- 4) 2) と同書，p.173
- 5) 新海節：「保育者養成校におけるピアノ教育」、『藤女子大学紀要．第Ⅱ部』，49，p.148 (2012)
- 6) 紺谷志野，多田純一：「保育士および幼稚園、小学校教員養成課程におけるピアノ指導法：リズム曲を中心に」、『大阪芸術大学短期大学部紀要』，41，pp.207-218 (2017)
- 7) 川辺真：『音符と鍵盤でおぼえるわかりやすい楽典』，音楽之友社 (2002)
- 8) 吉田直子：「奈良佐保短期大学 音楽基礎演習テキスト」 (2018)
- 9) 小林美実：『こどものうた 200 (Child 保育実用書シリーズ)』，チャイルド社 (1998)
- 10) 阪田順子：「保育者養成におけるピアノ指導法の提案：バイエル 98 番のリズム・モチーフに身近な発音「アマナットー」を当てはめる習得法の試み」、『岐阜聖徳学園大学短期大学部紀要』，50，p.35 (2018)
- 11) 野崎哲：『新しい楽典：付・問題集と解答』，音楽之友社 (1973)
- 12) 足羽章編：『日本童謡唱歌全集：ピアノ伴奏付』，ドレミ楽譜出版社 (2014)
- 13) 編集者名なし：『世界名歌曲全集』，kmp (2002)
- 14) 編集者名なし：『ピアノ伴奏 日本童謡唱歌全集：心に残る日本の歌』，kmp (2002)
- 15) 安田寛監修，小野亮祐，多田純一，長尾智絵著：『『バイエル』原典探訪：知られざる自筆譜・初版譜の諸相』，音楽之友社 (2016)